

銀座街づくり会議・銀座デザイン協議会 「銀座デザインルール」第3版 発行記念シンポジウム

世界と銀座 「街」の未来を共創する - これからも「街」はあり続けられるか？

## 【Part2: Local? 「街」の個性、銀座らしさの継承について考える】開催報告

シンポジウムシリーズのPart2を2021年11月22日に開催しました。Part1では、経済活動がデジタルにシフトする今、リアルな場で営む商売とその集合体である銀座の街の可能性を議論しました。続くPart2は、街の持つ個性から浮かび上がる「らしさ」の本質と、

その継承に焦点をあてます。齋藤充代表幹事の挨拶から始まり、バンコクからウィチエンプラディット・ポンサン先生（チュラロンコン大学講師）、パリからは森弘子先生（パリ在住建築家）がご登壇。各都市の事例を学びながら、街の個性について考えました。

### バンコクにおける公共空間再生の夜明け

2000年以降、鉄道沿線の発展を軸に開発が進んだバンコクでは、緑地不足、交通問題、貧富の差など、複数の都市問題を抱えていました。近年はこうした課題解決を目指して都市再生の動きが高まり、「都心回帰が進行している」とポンサン先生は紹介します。橋の公園化、旧市街地の景観形成など、行政が住民の提案を取り入れる形で複数の事業が実現しています。

またいくつもの未来のシナリオから逆算して今の行動を考える「Future Study（未来学）」の研究も進んでいます。商業の未来はデジタルとリアルが融合し、競争から協力へと関係性が変化すると想定。多様化する消費行動を見据え、デジタル技術を駆使してソフト面からも都市再生を支えてゆこうとしています

### パリらしさをつくるもの

森先生はパリの都市構造と銀座を比較し、「歩いて楽しい街」を共通点としながらも、公共空間が時間や季節、イベントごとに変化するパリの例を挙げ、「日常に入り込んだ非日常性がパリらしさをつくっている」と語ります。公共空間や文化施設を使ったイベントを文化庁が主催し、公私の境界を意図的に曖昧にして街の楽しさを創出していることも特徴です。使われなくなった既存の鉄道施設を再利用し、駅のホームは農園に、駅舎はレストランとして転用。環境意識も高く、昨年は車両の速度制限と歩道拡幅が決定、2022年にはテラス席のヒーターを廃止します。少し我慢が必要でも「こどもたちの未来のためにまずはやってみる」という柔軟な姿勢は、様々な事態に備える歴史に裏付けられた「パリ市民らしさ」があらわれています。

### 「街」の個性、銀座らしさの継承について考える

パネルディスカッションには伊藤明さん（銀座 伊東屋）が加わり、石山さつき先生（日仏都市研究者）のコーディネートで進行しました。2016年の銀座伊東屋建て替えに際し、新しいお客様を取り込みつつ、親しみやすさも残したいと『伊東屋らしさ』を6年かけて議論した結果、『伊東屋らしさ』は『銀座らしさ』と同じことだった」と伊藤さんは語ります。では「銀座らしさ」とは何か。お客様の期待に応えようと努力する個店の集合体が銀座の街であり、個と全体の相互関係は銀座らしさの一つでもあります。そしてお客様の期待とは、「新しい発見と高品質な商品があり、お客様からリスペクトされ誇りを持った販売員がいること」と伊藤さん。敷居が高いお店の価値や表情豊かなディスプレイなど「若いときにはわからない良さ」があるとポンサン先生は銀座を評価します。また伊藤さんからは「地価の高騰により個店の商売が揺らいでいる」との問題提起もありました。

石山先生は各都市の合意形成の方法にも関心を寄せます。行政主導で再生したバンコクでは、実験と検証を重ねて住民参加を促してきました。一方森先生は、強いリーダーシップと、「街は自分のもの」というパリ市民の主体性が街をつくっていると分析します。

商売と同時にお客様を継承することの重要性に着目した中島直人先生（東京大学准教授）は、銀座は「親子で来ることが大事な街」だと指摘。「若い人が前の世代の人とどのような関係をつくるのか」が大切だと小林博人先生（慶應義塾大学教授）は街らしさの継承に触れ、東條幹雄委員長との挨拶で閉会しました。